

農耕の始まりと広がり

津島岡大遺跡出土の農耕関連資料から

日本列島において、農耕はどのようににはじまったのでしょうか。この問題は古くから議論されてきましたが、近年、縄文時代の農耕と関連する資料が各地でみつかるなどして、あらためて活発な議論が行われています。

資料の増加によって、縄文時代に初期農耕が行われていたことを認める研究者は増加しつつありますが、その農耕がどのような内容のものであったのか、また、いつどのように広がったのかといった点については、なお不明な点が多いのも現状です。また、弥生時代になると水稲農耕が本格的に普及していきますが、初期の水田は現在の私たちが目にする水田の風景とは違っていただようです。

今回は、津島岡大遺跡から出土した資料から、農耕の始まりとその普及の状況をみていこうと思います。

(高田浩司)



縄文時代の石鎌



弥生時代前期の水田 (津島岡大遺跡)



ヒョウタンの種子

縄文時代に 農耕が行われていた?!



アズキの種子

各地で縄文時代の遺跡からイネの存在を示す資料が出土しています。津島岡大遺跡でも縄文時代後期に属するイネのプラントオパールや、弥生時代の「石包丁」と類似する石器などが出土しており、遺跡周辺で縄文時代に稲作が行われていた可能性もあります。また、イネ以外にも津島岡大遺跡ではウリ、アズキ、ヒョウタンなどの日本に自生しない植物の種子も出土しており、これらの一部は栽培されていたかもしれません。

プラントオパールって何?



土器の胎土中からみつかった
イネのプラントオパール

イネ、ヨシ、ススキなどのイネ科植物の中には、プラントオパールと呼ばれる微小なガラス質細胞が含まれています。ササの葉などをもつと手が切れるのは、このプラントオパールが原因です。プラントオパールは植物の種類によって形や大きさが異なることから、土の中に残ったものを調べることによって、当時の遺跡周辺の植生や環境などを知ることができます。近年、複数の遺跡で縄文時代のイネのプラントオパールが発見され、注目されています。

ただし、この方法では、上に堆積する新しい土層に含まれていたプラントオパールがしみ込んだ可能性もあります。そこで注目されるのが、土器の胎土自体を分析する方法です。この方法では後世の混入という可能性はなくなります。津島岡大遺跡第5次調査から出土した縄文時代後期の土器からは、この方法によってイネのプラントオパールを確認することができました。

縄文時代にも稲刈り道具が??

弥生時代では、イネの穂を刈る際に「石包丁」という道具を使います。岡山県や香川県などの中部瀬戸内地域では、石の表面を磨かず、打ち欠いただけの「打製石包丁」が多く使われますが、津島岡大遺跡では、それと類似した縄文時代の石器が出土しています。また、この石器には、弥生時代の打製石包丁にみられる「コーングロス」と呼ばれる光沢をもつ使用痕と非常に似たものも観察することができます。このことから、この縄文時代の石器も弥生時代の打製石包丁と同じようにイネの穂を刈る道具として使われたかもしれません。

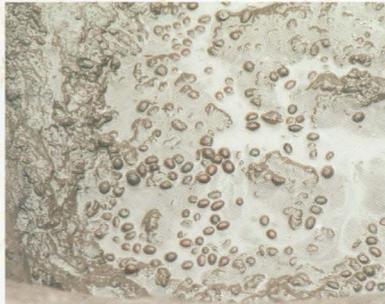
その他にも、津島岡大遺跡からは「打製石鋏だまいいしごわ」と呼ばれる石器が多く出土していますが（表紙写真）、この石器については、栽培した芋などを掘り起こすために使われた可能性が指摘されています。



(上) 打製石包丁と類似する縄文時代の石器
(下) 弥生時代の打製石包丁

縄文農耕の位置づけ

② のように、少なくとも縄文時代後期頃になると何らかのかたちで農耕が行われていた可能性は高いように思われます。しかし、当時の生業がそれに大きく依存していたとは考えられません。津島岡大遺跡では、たくさんの縄文時代後期の貯蔵穴が見つかり、中には多量のドングリが残っているものもありました。また、稲作についても、水田跡などは見つかっておらず、現在のような水稻農耕が行われていたとは考えられません。縄文時代においては、農耕とともに採集・漁労・狩猟といったさまざまな食料の獲得手段が用いられていたと考えられます。



貯蔵穴出土のドングリ



貯蔵穴群（縄文時代後期）

弥生時代前期の水田

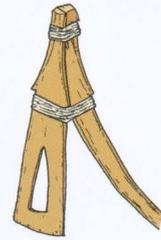
③ 弥生時代になると水稻農耕がはじまります。津島岡大遺跡やその周辺の遺跡でも、弥生時代前期の水田の畦畔が見つかっています。現在の水田と異なって、1区画の大きさがとても小さいことが特徴です。貴重な水を効率よく溜めるための工夫であると考えられますが、この水田については、耕作を行った痕跡が明瞭でないことや水をひく用水路が少ないことなどから、雨水を利用した「天水田」の可能性も指摘されています。



弥生時代前期水田の発掘風景

多様化する農具

弥生時代以降の農耕の広がりにもなると、さまざまな農具がみられるようになります。縄文時代では農具として使われたと思われる木製品はほとんどありませんが、弥生時代になると木製の鋤や鋤などの農具が広く普及します。機能分化も進み、「狭鋤」^{せまぐわ}、「広鋤」^{ひろぐわ}などがみられます。津島岡大遺跡でも弥生時代の木製の鋤が出土しています。ナスビの房のような形をした上端部分に柄を縛り付けて使用します。



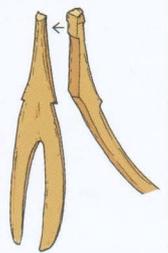
柄装着図



木製の鋤



広鋤



又鋤



磨製石包丁

弥生時代後期から古墳時代はじめ頃になると、鉄製の農具が普及するようになります。津島岡大遺跡では古墳時代はじめ頃の「摘鎌」^{つみがま}が出土しています。摘鎌は、石包丁にかわって、稲穂をつむ道具として使われました。



鉄製の摘鎌

● 第7回 発掘成果展「遺跡の土層を切る!」を開催

2003年10月27日から11月1日まで、今年も恒例の成果展を行いました。今回は遺跡から採取した遺構や土層のはぎ取りの展示を中心に、層ごとの土の違いや遺構の見分け方を実際に土を観察することで体感してもらうことを目的として開催しました。1週間の会期中に、大人から小学生まで110名の入場者を数え、鹿田遺跡第13次調査(総合教育研究棟)出土の井戸のはぎ取り断面や土器だまりの出土状況の復元に人気が集まりました。また、鹿田遺跡第14次発掘調査現地説明会にあわせ、10月18日から24日まで附属病院南病棟1階ホールで行った鹿田遺跡の過去20年の発掘を振り返るパネル展示にも、370人をこえる多くの見学者が訪れ、発掘調査に対する関心の高さをうかがわせました。

(忽那敬三)



第7回発掘成果展の様子

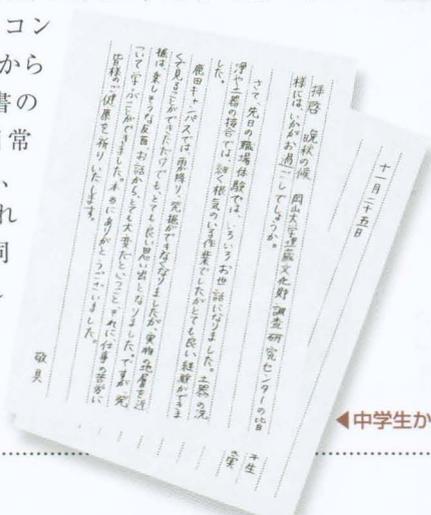
● 中学生の職場体験学習を実施

2003年11月19日から21日にかけて、職場体験学習として岡山市立高松中学校と竜操中学校のあわせて5名の中学2年生が、センターの業務に取り組みました。残念ながらあいにくの雨で鹿田遺跡での発掘作業は短い時間しか体験できませんでしたが、遺物の洗い・注記・接合といった整理作業を中心に、考古学研究室と講義の見学や、考古資料展示室やセンター展示室の掃除、展示替えの体験などを行いました。感想では「土器の接合は、19日(前日)は1つもできなかったけど、今日はいっぱいできたからすごくうれしかった!!」など、新鮮な驚きの声が多く寄せられました。そのほか、コンテナの片づけや各所から送られてくる報告書の整理など、いわば日常業務を支える作業にも、熱心に取り組んでくれました。今後も、同様の申し入れがあれば、受け入れていく予定です。

(忽那敬三)



人気が高かった接合作業



◀中学生からの手紙・職場体験に参加して



発掘現場での土層観察

[編集後記]

今回は、農耕の始まりについて取り上げました。本文でも述べましたが、この問題は、未だ不明な点が多いというのが現状です。そうした中、津島岡大遺跡から出土した資料は重要で、今後の議論を深めていく材料となればと思います。(高田浩司)

■ 編集発行 / 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

〒700-8530 岡山市津島中3丁目1番1号 TEL・FAX (086) 251-7290
[ホームページ] <http://www.okayama-u.ac.jp/user/arc/archome.html>

2004年2月20日 発行